令和３年度　江戸川区立葛西第二中学校　学校関係者評価　最終評価用報告書

様式①

学校教育目標	・ 自ら進んで学ぶ生徒になろう ・ あたたかい豊かな心の生徒になろう ・ 健康でたくましい生徒になろう	目指す学校像 目指す生徒像 目指す教師像	生徒が喜んで登校し、一人ひとりの確かな学力を伸ばし保護者・地域から信頼される学校 多様で変化に富んだ時代に希望をもって主体的に・意欲的に生き、将来を切り拓くことのできる生徒 生徒一人ひとりの成長やそれを支える教育活動に最大の努力を惜しまない教師
前年度までの学校経営上の成果と課題	＜成果＞教員の新学習指導要領を踏まえた授業改善の意識が高まり、授業力の向上に繋がってきている。また、ICTを活用した指導も増えてきている。生徒においては「プライド8」が徐々に浸透している。 ＜課題＞さらなるICTを活用した指導が今後も必要になってくる。そのため教員一人ひとりの指導力向上が課題である。また、さらなるライフワークバランスを考えた働き方改革を進める必要がある。		

教育委員会重点課題	取組項目	評価の視点	具体的な取組	数値目標	自己評価			学校関係者評価		年度末に向けた改善策
					取組	成果	成果と課題	評価	コメント	
いきいきと学ぶ学校づくり	確かな学力の向上	・「確かな学力向上推進プラン」の実施・改善や補習の実施などによる指導の充実と授業力の向上 ・「各教科等の連携教育プログラム」による連携の充実	・外部講師による補習の実施 ・9年間を通した具体的な指導目標を設定する。	年間136回の補習の実施。 英検、漢検、数検を6回実施し、100名以上受験	A	A	補習授業は年間の予定に従って136回の実施ができている。 英検参加人数84名、実施回数3回 漢検参加人数65名、実施回数3回 数検参加人数17名、実施回数2回 各検定の合計参加人数166名、実施回数8回 ・数値目標の達成及び「確かな学力の向上」に向け、実績を重ねることができたと考える。	A	新型コロナウイルスの影響で、学校への訪問が減り、生徒と話す機会も減ってしまった。そのため、学校からの報告で判断することになるが、学校の自己評価は適切だと判断される。	・確かな学力の向上に対して、実践してきた校内研修(指導力向上研修)を生かした次年度の授業改善を行っていく。
	読書科の更なる充実	・読書を通じた探究的な学習の充実 (読書科ノートの活用、資料の収集の仕方や記録の取り方の指導、自己の考えをまとめ表現する方法の指導、朝読書と1単位時間の授業との関連付け、他教科との関連等) ・学校図書館の整備、学校図書館を使った授業の充実	・探究的な学習(調査、調べ学習、体験活動、討論等)に図書館を利用する ・バーコードによる書籍の管理。LED照明化工事の実施	全校生徒が最低週に1回は利用する	A	A	・ビブリオバトルの実践などをとおして、生徒の読書に対する意欲が高まったと考える。それに伴い、図書館の利用回数も増えた。昨年度から実施しているバーコード化の整備や、環境整備として行ったLED照明も図書館利用の向上につながったと考える。	A	今後の課題として。読書に積極的に取り組む生徒と、取り組まない、または取り組めない生徒との差が生じ、2極化しないようにしていってもらいたい。	・本年度実施してきた読書科の充実における実績を成果とし、次年度も同様の取り組みを実践できるようにしていく。
	体力の向上	・体育の授業での補強運動や休み時間における主体的な運動の実施による運動意欲の向上	毎授業時に5分程度の体つくり運動を実施。昼休みの外遊びの奨励とボール等の貸出し	新体力テストにおいて、都平均を70%の生徒が上回る	B	B	・都の平均値と同様の数値、または数値を上回った生徒は全体の60%となった。数値目標の達成はできなかったが、目標に向け向上できたことは成果だと考える。	B	体力向上にももっと励んでもらいたい。	・制限された環境においても工夫実践してきた実績を成果とし、次年度は数値目標達成にこだわっていけるようにさせていく。
	オリパラ教育の推進	・「オリンピック・パラリンピックレガシー創造プラン」に基づく取組、「学校2020レガシー」の設定やオリパラコーナーの充実	本校卒業生作詞の区歌4番を含めた郷土愛、愛校神を醸成する。 オリンピアン、パラリピアンの招聘	オリンピックレガシーについてのアンケートで正しい理解の進んだ生徒80%以上	A	A	・本校の卒業生が作詞した「区歌4番」の紹介や、江戸川区が実施会場であったオリンピック競技のカヌーについて触れるなど、郷土愛を高める指導を実践することができた。数値目標達成のためのアンケートは後日実施するが、成果としての手ごたえを感じている。	A	適切な実践を図ってきたと考える。	・アンケート結果を受け、本校の生徒がオリンピック・パラリンピックの精神を向上させていると判断できているため、これを1つのレガシーとして、次年度の計画を立案していく。
	外国語教育の推進	・授業力の向上とALTの効果的な活用	・タブレット端末を使用した授業	ALTを活用した授業を年10回以上実施	A	A	・ALTの活用と計画的な学習タブレットの活用は実践することができ、教員の授業力向上につながっていると考える。	A	適切な実践を図ってきたと考える。	ALTの現状回数を補うようにタブレットを活用したことで、英語教育を充実した一つの形とした。これを成果につなげられたと考え、次年度へつなげていく。
	健全育成に向けた取組の強化	・いじめ・不登校の未然防止に向けた魅力ある学校づくりの取組の充実 ・チルドレン・サポートチームや生活指導連絡協議会の活用	・いじめ調査(アンケート)の年2回実施 ・スクールカウンセラーとの面談	いじめ・・・10件以内 不登校・・・15名以内 学校満足度要支援群出現率10パーセント未満	A	B	いじめ件数6件 不登校(30日以上の欠席)31名 ・高い数値目標に向け、生徒の行動を見守り、教員が団結し「安心で安全な学校づくり」に取り組んできた。目標達成には至らなかったが、学年間の連携や校内組織での対応など、適切な取り組みを構築し実践することができた。	B	地域の大人として、生徒の登下校を見守ってきた。そのなかで、「いじり」となる微妙な発言があり、気になった。「いじめ」と「いじり」の境界線が曖昧しいため、調整と整理が必要だと考える。	家庭や関係機関との連携の充実により、改善がみられている。数値目標を高く持つことで、教員の意識も高くなった。次年度も学校全体で組織的に対応する計画を確認していく。
特別支援教育の充実	特別支援教育の推進	・校内委員会の活性化を図ることなどによる指導・支援の充実 ・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた個に応じた指導の充実 ・エンカレッジルームの活用促進 ・副籍交流、交流及び共同学習の充実	・特別支援に関する校内研修を計画的に実施 ・指導方法の共通理解 ・特別支援巡回指導員、専門員との連携 ・副籍交流の積極的受け入れ。	特別支援委員会の開催・年25回	B	A	・本年度の開催回数は1月終了時点で13回であり、25回の数値目標には届かない。しかし、前項の「いじめ」や「不登校対応」において「生徒理解」に努めたことで、情報の共有化、手立ての組織的実践が少ない会議の回数において効果的な実績につなげられたと考える。	A	適切な実践を図ってきたと考える。	特別支援委員会を中心にSC・「はあとポート」をはじめとする関係機関との連携のもと、家庭との連携を密に行えたことで、一つの成果につながることができたと考える。次年度に向け、関係機関との情報をまとめ、他の生徒の実態と整合性が図れるようにしていく。
	障害者理解	・副籍制度、障害者理解の推進	・車イス体験、白杖体験	アンケートで障害者理解の進んだ生徒80%以上	–	B	・本年度は新型コロナウイルスの影響で体験はできなかった。しかし、障碍者差別解消法や個の尊重、多様性の理解など様々な学びは教育実践の中で深めてきた。アンケートは後日実施するが、成果としての手ごたえは感じている。	B	適切な実践を図ってきたと考える。	教員の障害に対する理解が向上したことで、生徒相互の関係を考えさせる教育実践が図れるようになった。結果、互いの居場所を作りあえる、より良い結果につながってきていると考える。次年度も組織的対応ができるように計画を確認していく。
	インクルージブ教育の充実	・共生社会の形成 学校外の人材活用と各関係機関との連携	・障碍者からの講話、ボランティア体験の実施	ボランティア参加数・・・生徒 半数以上	B	B	学校ボランティア活動を分散型で行った。全校の半数以上の生徒が参加した。ごみを拾うオリンピアが残したレガシーを大切にし、インクルーシブ教育の実践につなげることができたと考える。	B	適切な実践を図ってきたと考える。	新型コロナウイルスの影響で、従来の実践計画が充分に測れなかったところがあるため、来年度計画の充実を図っていく。
教員の資質向上	教員研修の充実	・学習用タブレットを活用した授業実施に向けた研修	・ICT研修の実施、タブレット端末活用した授業を計画的に実施	ICT研修を3回実施 ICTを活用した授業を実施	A	B	10月までにICTを活用した授業実践と模擬授業を全教員が行った。 2月からは、オンライン授業の実践を開始した。	B	今後、教員の力量やスキルによって、「ICT授業の「回数」や「取り組みガ」「内容」などに差が生じないようにすべきだと考える。	実践導入として初年度を終えた成果を分析し、より適切な実践方法に向け研鑽を重ねる。
	校内研修の充実	・研究主題に沿った研究授業の実施	・計画的に授業研究を実施	全教員が年3回以上の授業研究を実施	B	B	校内研修において3回の授業研究を行った。授業者の指導方法などを模範として、各教員が授業改善委取り組んだ。成果としてICTの活用など、指導方法の向上につながったと考える。	B	適切な実践を図ってきたと考える。	生徒の学力向上と結びつけながら、指導力向上研修を図ってきた。相互効果が得られたことを実績とし、より授業スキルの定着を図っていく。
	授業力向上のためのOJTの推進	・OJT推進委員会主導のもと若手教員育成及び中堅教員の意識向上	・若手教育の研究授業実施 中堅教員による若手教育の実施	年間2回の若手教員の研究授業と指導	A	A	若手教員の授業実践は計画的に取り組むことができた。協議会も実施し、若手の指導助言をする中堅教員の意識向上、人材育成力を向上させることができた。	A	適切な実践を図ってきたと考える。	実務的なOJTをとおして、若手教育の育成を図ってきた。次年度以降も計画的に育成にあたれるように、成果としてまとめていく。
特色ある教育の展開	生徒への意識付け「プライド8」	・葛西第二中学校で学ぶ事に誇りを持ち、向上心と自立心を持った生徒の育成	朝礼、保護者会、学校便り、HPにより、浸透を図る。	年間2回(10月3月)生徒へのアンケートの実施	A	A	全校集会、学校・学年だよりなどを通じて生徒の意識向上を図ってきた。アンケートは後日実施するが、「プライド8」の取り組みは生徒に定着していると考える。	A	葛西二中らしさがあり、地域の住人として、とても応援している。	生徒の意識向上が図れたことで、活発な学校生活をおくる生徒が増えてきた。制限された生活においても、各成果に結びついたのは、礎として「プライド8」があったからだと考え、来年度の実践につなげていく
	・葛西二中オフィシャルボランティアの募集	・地域行事におけるボランティア活動の組織的推進	・葛西二中オフィシャルボランティアの募集	全校生徒数の80%以上の参加	–	–	本年度も新型コロナウイルスの影響で実施することができなかった。			新型コロナウイルスにおける制限、制約がなくなり、活動が再開できることを期待する
	キャリア教育・情操教育の充実	・キャリアパスポートを含む3年間を見通したキャリア教育の充実 ・外部人材によるキャリア教育、情操教育の推進	・地域の方による面接、職業人の話を聞く会、二胡奏者・ミュージカル俳優による講演	地域面接(2学年)・職業人の話(1学年)・12月実施、講演(2回・2,3年)実施予定	A	A	地域面接など一部の内容は実施できなかったが、実施できた多くの教育活動をとおして、キャリア教育・情操教育の充実は図ることができたと考える。	A	適切な実践を図ってきたと考える。	オリンピック・パラリンピック教育と連携して実践してきた情操教育など、新型コロナウイルスの制限下においても充実した教育実践を図ることができたと考える。その成果を来年度計画に取り組むようにしていく。